

大妻女大 家政学研究科

小山田桃子

目的 計測器具による身体形態の正確な把握は、着心地の良い被服を設計するうえで、極めて重要なことである。一方、被服の着用には、自己の理想とする身体像に自己を近づけるという効果がある。ところが、現実の自己の身体形態と自己の身体形態に対する意識との隔たりは、この効果に深く関連すると考えられる。そこで本研究では、現実の身体形態と自己の身体形態に対する意識との関係について検討を行った。

方法 対象：一般女子学生 109名（20～22歳）期間：昭和58年10月～昭和59年1月

資料：(1)身体計測（64項目） (2)アンケート調査（①自己の身体各部位に対する意識について、②自己の身体各部位の満足度について、③自己の身体全体に対する意識について、④自己の身体の理想値についての計94項目、回答形式は①～③では形容詞対への5段階評価、④では数値の記入）

分析：(2)の項目相互間のケンドールの順位相関係数および(1)と(2)の項目相互間のピアソンの相関係数を算出し、項目相互間の関係を検討した。

- 結果
- 一般的に、四肢は長く細く、体幹は短く細く、体重は軽く、全身は高いことに満足度が高く示された。現代人のスマート嗜好がうかがわれる。
 - 自己の意識と現実値との相関をみると、身体各部位の太さに関しては r は 0.5～0.7、長さに関しては r は 0.3 前後であった。太さの方が、より客観的に判断されていると考えられる。
 - 現実値・理想値・満足度の関係をみると、一般的に身長では現実値が理想値に比して大きい方で、胸囲・腰囲・体重では小さい方で満足度が高く示された。
したがって、自己を理想像に近づけるという被服着用の効果が期待されているものと思われる。